



つなみのお話を読んで

中幡小学校 四年一組 堀内 一志

ぼくは、『つなみてんでんこはしれ、上へ』という本を読みました。この本を選んだ理由は、学校の先生に、つなみのお話だよとしようかいされて、テレビでつなみの映像を見たこともあったので読んでみたいと思ったからです。

この本は、二〇十一年、三月十一日に起きた地しんで、東北地方につなみが来て、主人公の小学生の男の子が、友達や先生、近くの中学生達といっしょにつなみからにげるお話です。

この本を読んで、ぼくが心に残ったところは二つあります。まず一つ目は、みんなが助け合いながら、つなみからにげる場面です。主人公の男の子は、つなみからにげる時に、上ばきがかたほうぬげてしましますが、友達のゆうとが「オレのはけ！」と言って、上ばきのかたほうをかしてくれます。あぶないものがおちているかもしれないし、自分の命もかかっている時に、上ばきをかしてあげられるゆう気がすごいなと思います。ぼくだったら、あわててしまい、かしてあげることができないと思います。また、中学生達が、小学生達と

手をつないだり、ほいくえんの子をおぶったり、手おしのひなん車を上までおしていったり、自分の命もあぶないのに、人のためにがんばるすがたがすごいなと思ったし、かっこよくてヒーローみたいだなと思いました。

もう一つ心に残ったところは、地しんの後の七夕に小学生達がたんざくを書いたところです。「お母さんが見つかりますように」「パパとはやくいっしょにくらせますように」「もう大きな地しんとつながりませんかのように」などと書いてあって、それを見て、すぐくむねがドキンとして、なみだが出そうになりました。ぼくも、あの地しんの日、お父さんが会社から歩いてむかえにきてくれるのをまっついて、とても不安な気持ちになりました。だから、家族がいなくなってしまう子達は、たんざくにすぐくねがいをこめて書いたのだらうと思うし、その子達のことを思うと、ぼくも泣きたい気持ちになりました。

ぼくは、この本を読んで、命というものは本当に大事だと思ったし、地しんのようなさいがい起きた時にも、周りの人達と助け合っていくことが大切だと学びました。そして、この本に出てくる中学生達のように、みんなの役に立てるような人になりたいと思いました。